
ひかりの庭

金本ちはや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひかりの庭

【Nコード】

N5945G

【作者名】

金本ちはや

【あらすじ】

聡子さんの指先からは、いつもオレンジの香りがした。ぼくと、聡子さんと、先生。甘酸っぱいオレンジケーキ、緑輝く庭。幼い頃から変わらなかった光景は、ゆっくりと移ろいゆこうとしていた――。ある少年の、ゆるやかな初恋の記憶。【『春・花小説企画』参加作品】

(前書き)

拙作は、『春・花小説企画』参加作品として書かせていただき
ました。他の参加者の方々の作品とともに楽しんでいただけで幸い
です。

聡子^{そつし}さんの指先からは、いつもオレンジの香りがした。

庭先から茶の間に上がりこむと、彼女は必ずオレンジケーキを焼いてくれた。ふっくらとした卵色のスポンジに練りこまれたオレンジのかけら。果実の弾けるような酸味とは違うやわらかな甘酸っぱさが、ぼくは好きだった。

少女の時分から大人びた、白い面^{おもて}にそつと微笑みを浮かべる人だった。ぼくがランドセルを背負うようになった頃にはすでに高校生だったから、幼なじみというには年が離れすぎている。家が隣同士というだけで実の弟のようにかわいがってもらった。

両親が共働きだったぼくは、学校が終わると聡子さんの家に「ただいま」と帰った。出迎えてくれるのはたいてい聡子さんで、たまに二階の書斎から下りてきた先生と顔を合わせることもあった。

聡子さんの父親である先生は作家で、一日中書斎に籠^{いわお}りがちだった。娘以上に寡黙で、巖^{いわお}のような顔はあまり表情を変えなかったが、ぼくの勉強を見てくれるときのまなざしは穏やかだった。

聡子さんと先生がふたりで暮らす家は、古い香りに満ちていた。日に焼けて色褪せた畳、細かい傷痕に覆われた柱、どこか埃っぽく湿った空気。あの家の時間は、深い森のなかのようにゆっくりと流れていた。

ぼくは庭に面した茶の間で宿題をしたり、聡子さんと先生から借りた本を読んだり、聡子さんのオレンジケーキを食べたりして過ごした。空の明るい日には縁側に出て、光の射す庭を眺めたこともある。

隣家の庭はなかなか広く、いつも緑に溢れていた。もともと、亡くなった先生の奥さん——つまり聡子さんの母親が手入れをしていたそうだが、主を失ってからのはたまに依頼された業者が整える程度で、草木はのびのびと生を謳歌していた。しなやかな草葉に混じっ

て名前も知らない花が咲く様は、まさに野原だった。

荒れたというには賑やかなその庭が、ぼくは嫌いではなかった。草がこすれ合う音や靴底が土を踏みしめる音、虫の息遣い。庭を通るたび、微かなささやきに耳を澄ませた。

白い陽射しに緑が輝くような光景は、頭がぼうつとするほど美しかった。日が暮れて、母が迎えに来るまで見つめていても飽きなかった。

ただ、聡子さんや先生の目には、違う意味を持って映るらしかった。庭を見るふたりの表情には、愛しさと、なかなか抜けない棘のような痛みがあった。

「庭をきれいなままにしておくね、お母さんがどこかにいないか探してしまうの」

聡子さんは、どこかさびしげな笑顔で教えてくれた。

「放ったらかしにしておけば、どんどん様子が変わるでしょう。そうすれば、お母さんがいなくなってそれだけ経つんだってわかるから」

ぼくは、もうずいぶん前のことを思い出した。

——拓巳^{たくみ}くんは、オレンジケーキは好き？

そう尋ねてきた聡子さんの顔がなぜか泣き出しそうに見えて、ぼくは「うん」と大きく頷いた。

——わたしのお母さんもね、よくオレンジケーキを焼いてくれたの。その指先からも、オレンジの香りが優しく香ったのだろうか。

ぼくの背丈が聡子さんに並ぶ頃、彼女はある男性と婚約した。

学生時代からの恋人で、出版関係の仕事に就き、先生の編集を務めたことも何度かあった。ぼくも数えるほどだが、遊び相手になってもらったことがある。ほっそりした聡子さんと並ぶと、まるで熊のような体格のいい青年だが、目尻の垂れた笑顔はとても人懐っこ

かった。

春の終わりに結婚式の日取りが決まってから、聡子さんの家はいつにない慌ただしさに染まっていた。結納やら引越しの準備やらと、傍で見ているだけのぼくですらそわそわしてくる空気は、しかし悪いものではなかった。

聡子さんたちは先生との同居を考えていたそうだが、当の本人から新居へ移るように釘を刺されたらしい。「嫁に行く身で実家に居着くんじゃないって怒られたわ」と聡子さんは苦笑していた。

彼女も、その夫となる彼も、先生のことを心配していたのだと思う。ひとり娘の聡子さんが嫁いでしまえば、あの家に先生ひとりきりだ。聡子さんは苦笑したあと、ふと何か言いたげに顔を曇らせた。「あのね……拓巳くん」

ぼくは聡子さんの言葉にならない声に、小さく笑って答えた。

「じゃあ聡子さんの代わりに、もっとぼくが居着きますね」

彼女も目を瞬かせたあと、心からほっとしたように頬をゆるめた。「……ありがとう」

聡子さんを安心させられるぐらいには、ぼくも成長したのだ。

その日、空は透きとおるような青を湛えていた。

まだ肌を焦がす熱は持たない陽光が、チャペルの壁を白々と輝かせる。鐘の音は、どこまでも鳴り響くように澄みきっていた。

扉が開いて新郎新婦が現れると、待ちかまえていた人々が歓声を上げた。子孫繁栄を願うライスシャワーが、色とりどりの花びらとともに若いふたりに降り注いだ。

少し離れた場所に佇む先生は、幸福の雨に打たれる聡子さんをじっと見つめていた。凧いだ海を思わせる双眸は、そのときばかりは潤み、万感に揺らいでいた。そのことに気づいていたのは、おそらく隣にいたぼくだけだろうけれど。

ひとしきり祝福が続くと、同じ式場内にある庭園に場所を移し、披露宴を兼ねたパーティがはじまった。ぼくは適当に飲みものを貰うと、出席者に挨拶をして回る聡子さん夫婦や先生の姿を見守っていた。

ようやく着慣れてきた学生服姿のぼくは、カクテルやワインを片手に談笑する大人たちのなかで浮いていた。同世代や年下の子どもの姿がないわけではないが、家族連れでやってきている初対面の相手に声をかける勇氣はなかった。

それでも、幸せそのものの聡子さんを見ていられるだけで充分だった。雪のような純白の花嫁衣裳に身を包んだ彼女は、内側から輝いているようだった。白百合の精がいるとしたら、こんな姿をしているのではないだろうか。

「拓巳くん！」

聡子さんがこちらに気づいた。ドレスの長い裾など気にせず、軽やかな足取りで駆け寄ってくる。改めて間近にすると、優雅な白鳥のようにも思えた。

「……聡子さん、すごくきれいです」

「ふふ、ありがとう」

聡子さんは嬉しそうに笑った。それははじめて見る、どこか無邪気な表情だった。

「拓巳くんにそう言ってもらえただけでも、着た甲斐があるわね」

「みんなそう思ってますよ。なんたって今日の主役じゃないですか」

「そうね。でも、拓巳くんは特別よ」

聡子さんは先生によく似た、静かでありながら何よりも雄弁な瞳をやわらかく細めた。

「拓巳くんはわたしにとって、本当の弟のようだった。拓巳くんがいてくれたから、わたしも、お父さんも、さびしさや悲しみを癒すことができたの」

ありがとう、と彼女はささやいた。

「……ぼくのほうこそ」

喉の奥まで詰まる想いは、なんという名前だろうか。ぼくにとつて聡子さんは、オレンジケーキを焼いてくれた優しいお姉さんであり――だれかを大切に思うことを教えてくれた女性だった。

かけがえのない、ただひとりの。

「いっぱい、いっぱい、いろんなものを貰いました」

こみ上げてくる熱のままに泣いてしまっそうだった。それでもこんな日に涙は似合わないから、ぼくは笑った。

「本当に、おめでとうございます」

「――ありがとう」

聡子さんは、まるで少女のように微笑んだ。

聡子さんが去った家は、灯ひが消えたようにひっそりとしていた。式場から帰ってきてから、先生はずっと茶の間の縁側から庭を見つめている。ぼくも少し間を空けて隣に座っていた。

ぼくの膝の上には、真っ白なリボンで束ねられたブーケがあった。瑞々しい緑のなかで、リボンと同じ色の花が咲いている。細い花びらが五枚、星を描くように集まった清楚な花。

――これはね、オレンジの花よ

ブーケを差し出した聡子さんは、内緒話をするように教えてくれた。花嫁のブーケは未婚の女性が良縁を願って譲り受けるものだろうに、彼女は「拓巳くんを受け取ってほしいの」と言って譲らなかった。

――オレンジの花言葉を知っている？ 『花嫁の喜び』、『花嫁の心』なんて意味もあるの

ブーケを受け取った者は幸福を得る。聡子さんは祈るように目を伏せた。

――拓巳くんが幸せになりますように。これはそう願う、わたしの心よ

そんな風に言われてしまえば、拒むことなどできなかった。

ぼくはブーケを取り上げると、白い花びらにそっと口づけた。聡子さんが焼いてくれたオレンジケーキの味を思い出す。

「……時間というものは」

ぽつりと、雨が降り出すように眩きが落ちた。

ブーケから顔を上げて先生を見る。

「あつという間に過ぎてしまう」

「……そうですね」

ぼくは頷くと、庭に据えられたまま動かない先生の視線を追いかけた。

夕闇に沈んだ庭は、息をひそめているようにも眠っているようにも見えた。夜を越えて朝を迎えれば、また光のなかにいきいきと目覚めるのだろうか。

——いいや。

きっとぼくの目には、もう今までの輝きは映らない。同じようでもまったく違うものに見えるはずだ。

光に満ちた庭の向こうには、いつだって聡子さんが待っていてくれた。

彼女がいたからこそ、この庭はあんなにもまぶしく美しかったのだ。

「先生」

「なんだね」

「奥さんが亡くなってから……先生の目に、この庭はどう見えましたか」

唐突で不躰な質問にも、先生は怒らなかった。

わずかな沈黙のあと、淡い笑みを含んだ声で答えてくれた。

「美しく——とても、切なかったよ」

ぼくは静かに目を閉じた。

万華鏡の中できると光が踊るように、移ろう時は刹那刹那の美しさを浮かび上がらせる。やがてぼくは、聡子さんのいない庭に

も新しい光を見出だすだろう。

それはきつと、聡子さんや先生が見ていたものとよく似ている。

「先生」

ぼくは目を開くと、もう一度隣に呼びかけた。先生のまなざしが振り向く。

「今度、オレンジケーキを焼いてきますよ。そしたら一緒に食べてもらえませんか」

先生は、まるで爽やかなオレンジの香りを思い出したように微笑んだ。

「ああ、もちろんだとも」

はたして、ぼくにうまく作れるかどうかわからないけれど。

光り輝く庭を前に食べるそれは、きつと幸福の味がするに違いない。

(後書き)

オレンジの花言葉は、『花嫁の喜び』、『花嫁の心』、『結婚を祝福する』など。(出典…そめいよしのの並木道、ローズマリーキッチン)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945g/>

ひかりの庭

2010年11月19日19時10分発行